

創政会行政視察報告書



視察先	<ul style="list-style-type: none">● 石川県七尾市 「三世代家族住宅リフォーム奨励金」について● 石川県珠洲市 「ブランド化に向けた取組」について● 〃 宗玄酒造(株) 「酒米による地域おこしの取組」について● 石川県輪島市 「本町・朝市通り整備事業」について
視察日	平成30年5月21日(月)～平成30年5月23日(水)
参加者氏名	<ul style="list-style-type: none">・沼田 義雄・矢口 迪夫・内田 卓男・矢口 清・川原場 明朗・海老原 一郎・篠塚 昌毅・小坂 博・下村 壽郎・島岡 宏明・塚原 圭二・勝田 達也

視察先	石川県七尾市
視察日	平成30年5月21日13:00～
内 容	「三世代家族住宅リフォーム奨励金」について
目 的	中心市街地活性化や定住人口増加、高齢者住宅のバリアフリー化等の住宅リフォームに関する助成は土浦市でも実施しているが、三世代家族の同居に特化した助成事業は未実施であるので、その事業の目的と費用対効果等を検証し、この事業を土浦市に導入できるか検討をする。
説明者	建設部都市建設課 課長 三野 助樹 " 北野 勝治 " 小川 洋一

「三世代家族住宅リフォーム奨励金」交付事業について

七尾市でこの事業を導入する事に成ったきっかけは、市長に市民の方より、すでに市では定住促進関係の住宅取得に関する補助事業等を実施しているが、祖父母や新たに所帯を持つ若者夫婦と同居するための住宅リフォームなど補助事業が無いので、このようなケースの助成金を検



討してほしい旨の意見が寄せられました。また、数年前より議会でも老朽化した住宅のリフォームなどの助成を求める提案がされていたことを踏まえて、単に住宅の改修工事に対する助成を実施するのではなく、少子高齢化の進む中で、定住人口の促進と次世代に担い手となる若者が結婚を機に同居する場合や、三世代同居を新たに



始める場合等について補助制度の導入が検討され、平成29年より「三世代家族住宅リフォーム奨励金」交付事業が始まりました。

七尾市の人口は平成16年当時約64,000人でしたが、平成30年では約54,000人を切り、一万人の人口減となり、高齢化率も35%と平成16年当時より10%増

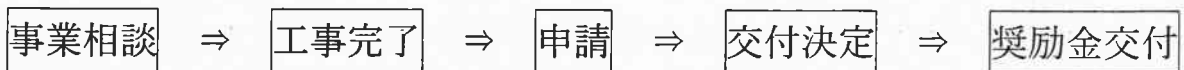
えている状況です。そのような背景を踏まえて、若者や子育て世帯が七尾市内に定住するために次の4点を事業の狙いとして「三世代家族住宅リフォーム奨励金」が創設されたました。

1. 移住・定住人口の拡大
2. 同居による子育て支援の体制づくり
3. 高齢者が安心できる住宅環境の提供
4. 若者が定住し、活気ある地域づくり



など世帯間の助け合いにつなが

る4点です。交付要綱は「新たに三世代で同居、準同居を始める世帯や、結婚を機に親と同居、準同居する世帯が、100万円以上の住宅の増改築や改修工事を行う場合に50万円を奨励金として交付します。対象となる工事には、子ども部屋や寝室の増築、トイレ、浴槽、台所などの改修（設備の取り換え含む）となります」奨励金の交付を受けるまでの流れは



となり、交付決定から約1週間で奨励金が交付されます。

また、申請などの手続きを地域の工務店などの建設業者がアドバイスや代行してくれるのようです。平成29年より始まったこの事業の初年度は、3件の交付実績があり、相談件数は徐々に増えているようです。今後のこの事業の取り組みとして、単に住宅リフォームのための補助事業ではなく、人生100年時代と言われ、団塊世代が年齢を重ねていく今こそ改めて家族の絆を大切に感じ、互いに支え合いながら一緒に、また近くで暮らすという選択をする家族のきっかけ創りとして、この事業に取り組んでいくそうです。

主な質疑

Q：奨励金の問合せ状況と市民の反応についてお伺いします。

A：奨励金に関する相談件数は徐々に多くなっています。その中で、従来から三世代で暮らしている世帯からの問合せがありますが、残念ながらこの制度の対象外となります説明をしています。

Q：一年間この制度を運用してきましたが、課題があれば教えてください。

A：県からこの制度に関する補助もあるが、制度のすべてが補助の対象ではないため、市独自で実施するための財政的な負担が多くなってしまうので、どのような形でこの事業を継続していくかが課題です。

Q：三世代でも様々な形態の世帯があると思うが、全てのケースが助成金の交付対象になるのかお伺いします。

A：様々なケースがあるが、新たに三世代で所帯を構える全てのケースが補助対象となるようにしています。

Q：この制度の助言または申請代行を行う建設関係などの業者さんはいますか。



A：市で建設関係業者にこの制度を周知しているので、工務店側からリフォームを検討している市民の方々に助言や申請手続きの代行を実施しているケースが多くなっています。

Q：この制度は数か所のリフォーム工事を実施するたびに申請しても補助の対象になりますか。

また、交付後の調査等がありますか。

A：この制度は一つの建物、関わったご家族に1回だけの補助制度となります。また、5年間は建物の売却ができませんし、家族構成変動も調査することと成っています。

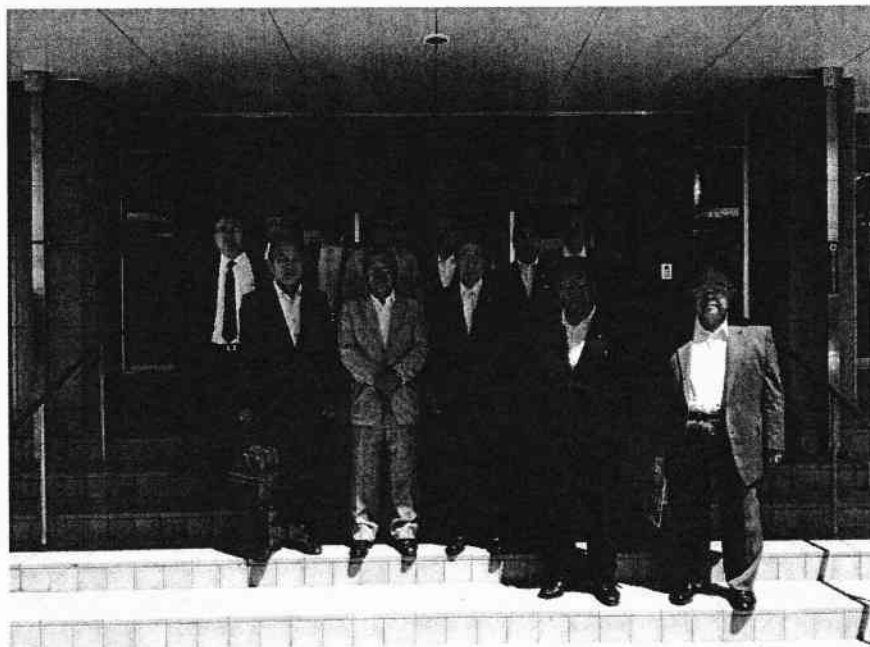
Q：この補助制度を受ける世帯の所得制限は設けているのか、また、目標を達成した場合の財政的な負担や達成を数値化することなどは検討しているのか。

A：世帯の所得制限は設けていません。市税等などの滞納、未納が無い事だけを経済的な要件としています。石川県で50万円の奨励金を設けているのは本市だけです。財政的な負担はありますが、定住促進などの事業で約5000万円の予算を組んでいるのでその中で実施できると考えています。数値化は検討していませんが、三世代を検討する家族が増えているので効果はあると思います。

視察先	石川県珠洲市
視察日	平成30年5月22日9:30～
内 容	「ブランド化に向けた取り組み」について
目 的	従来種の大豆である「大浜大豆」を地域活性化に生かそうと豆腐や豆乳ソフトクリームなどの商品開発、そして販売を地域住民が出資して法人化するまでの事例を聞き、土浦市で進めているブランドアップ事業促進に役立てる。
説明者	珠洲市議会事務局 主任 竹澤 学 珠洲市農業振興課 課長 古矢 孝之 株式会社のろし 代表取締役 新 弘之

「ブランド化に向けた取組」について

珠洲市は能登半島の先端に位置し、人口14,609人で、地場産業は、小規模な農林水産業が中心だが、過疎化、少子高齢化の進行が著しく後継者不足となっています。しかし、近年では、豊かな自然環境による里山里海が見直され、各地域に伝わる

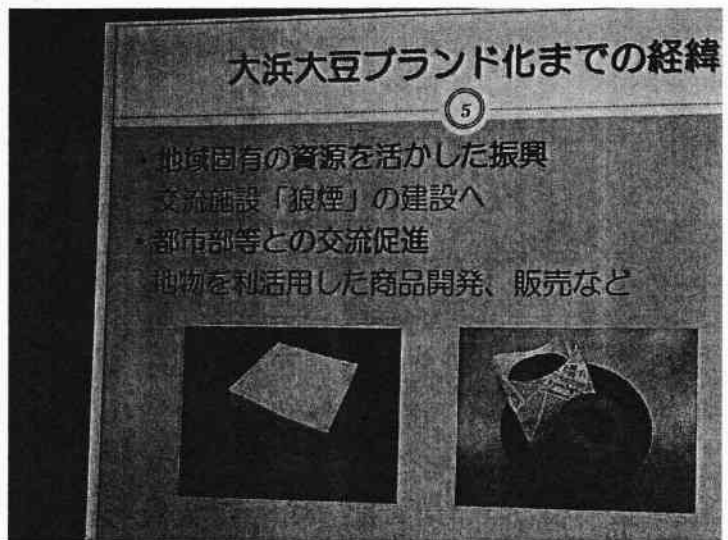


「伝統文化」や「祭り」の継承や揚浜製塩業や珪藻土七輪など、珠洲固有の地域資源を有効に活用し、また、産官学の連携事業として、国立金沢大学との交流事業を積極的に進め、珠洲の魅力の発信と交流人口の拡大を図っています。



珠洲市が取り組んだのは、地域で栽培されていた大浜大豆を活用したブランド化の取組です。地域の一部の生産者が栽培していた品種「大浜大豆」を市の名産品として活用するために平成9年に横山振興会を設立し、大浜大豆の生産を復活させ、地域ブランド化への事業が始まり

ました。平成11年より寄せ豆腐やつと納豆などの大浜大豆を加工した商品化が始まり、平成19年に「大浜大豆」をブランド認定いたしました。この「大浜大豆」等の地域固有の資源を活かした振興と都市部等との交流促進を図るために、交流施設「狼煙」を建設し、地物を利活用した商品開発、販売などを実施する計画を策定し、平成21年3月に総事業費2億1千3百万で施設を完成させ、同年4月29日にオープン、運営は地域の住民有志8

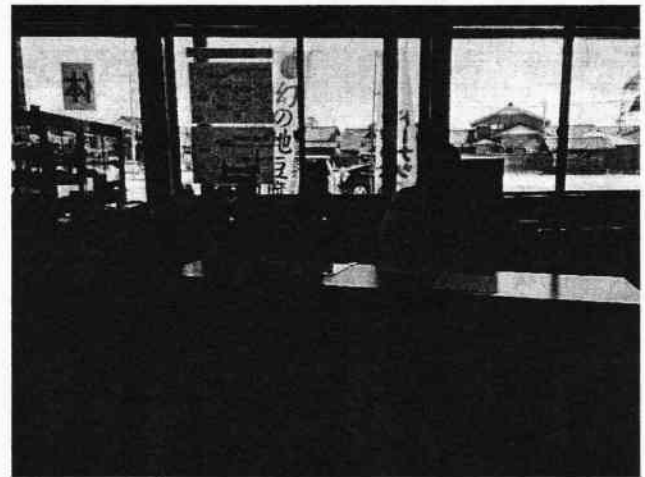


7人が出資者となり出資金380万円にて設立した「株式会社のろし」が指定管理者として管理運営しています。指定管理といっても特定の指定管理料を市が支払うのではなく、利益が上がった場合に利益の3

0%を市に納付する契約となっています。「株式会社のろし」では店内の全てを地元産の名産品で、商品の展示から新たな商品開発など12名の役員が中心となって様々なアイデアを出し合い、地豆腐、豆乳バームクーヘン、豆乳ソフトクリーム等々や全ての商品開発が「株式会社のろし」独自で開発したものであります。

平成21年度のオープンから入込み客数3万人を超え、年々来場者を増やし、順調に利益を上げ、市に納付する金額も増えているとのことでした。

「株式会社のろし」の代表取締役と「道の駅狼煙」の駅長を兼務している新（しん）さんに設立当時のご苦労や運営の取組について直接お話を聞く機会を設けていただいたことは大変参考になりました。



主な質疑

Q：地域のほぼ全世帯が出資者となって法人化した経緯についてお伺いします。

A：この地域は、20年ほど前までは大きな観光施設があり、水産物・農産物の物産販売を実施していましたが、観光ブームが去りこの施設が閉鎖しました。閉鎖後、

20年間この街が消えたような寂しさを味わいました。そこで、地域の有志が何とかしようとして協議が始まり、当初は無人直売所を設置するなどの事業をはじめ、市に対しても何とか観光物産施設を設置してくれないかと要望活動を始めました。地域の要望を受けた市長より、運営会社を設立してはとの提案を受け、住民有志が地域を回り、この事業の説明を行い、一株1万円で出資者を住民に募り、紆余曲折有りましたが、どうにか出資金を集めて設立の運びとなりました。

Q：施設の運営や販売方法、商品開発についてお伺いします。

A：当初は野菜などの同じ商品の販売値段が統一されずに売れ残る店と売り切れる店の格差が生まれるなど、品質管理、展示場所等の生産者と施設の間で様々な問題があったが、生産者と何度も



協議する時間を設けるなどの努力をしてきましたので、現在はスムーズな運営ができています。また、新商品の開発や陳列棚の作成、陳列方法などもすべて手作りで実施しています。

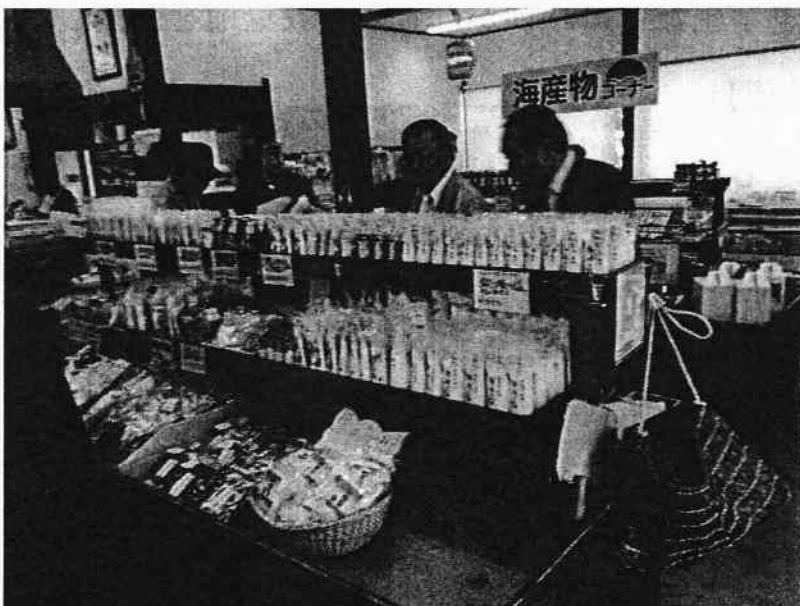
Q：生産農家の数はどれくらいありますか。また、出品者の数をどれくらいですか教えてください。

A：圃場整備の関係で農地を集める施策をとっていますので、現在では20件程の生産者です。漁業関係や加工品関係など商品の出品の登録者数は100を超えている状況です。

Q：市としてこのブランド化された商品や施設「道の駅狼煙」の宣伝や販売拡大などの助成はしていますか。

A：直接的な助成は行政では実施していません。設備などの支援は実施している

がビジネスとしては助成していません。市の観光交流課では施設の宣伝を実施しています。市では、この施設の骨格を作ってくれましたが、施設の運営などの肉付けは全て地域の住民が行いました。



視察先	石川県珠洲市 宗玄酒造(株)
視察日	平成30年5月22日13:00～
内 容	「酒米による地域おこし」について
目 的	宗玄酒造では社会人や学生などに呼びかけ、耕作放棄地を復田し、新しく開発された酒米「石川門」を作り、酒米による地域おこしを実施しています。土浦市でも小町の館等にて、似たような事業を実施しているので、この事業の計画や内容、効果等を本市の事業の参考とするため
説明者	宗玄酒造株式会社 代表取締役 徳力 暁

「酒米による地域おこし」について

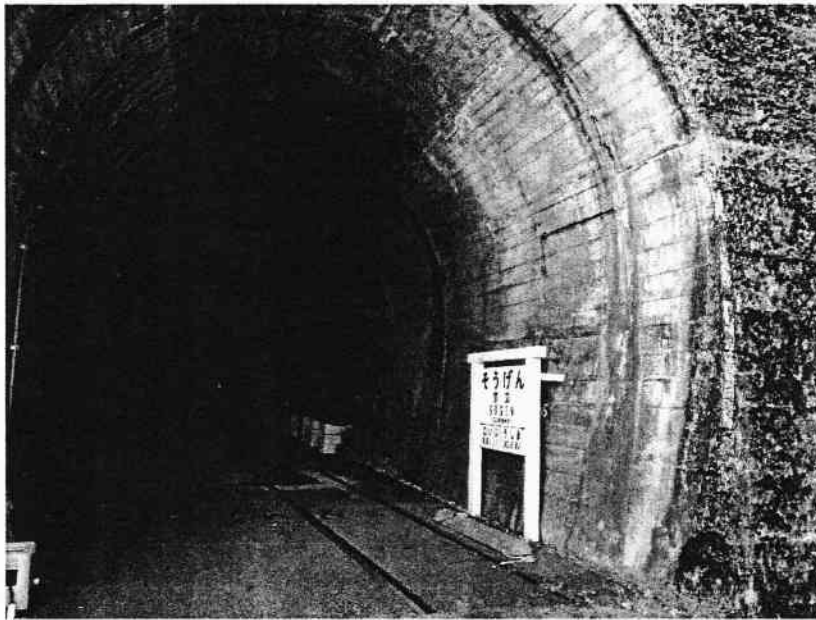


宗玄酒造の始祖は、戦国時代の能登官僚七尾城主・畠山義春の一族。江戸中期の明和5年（1768年）創業以来250年の歴史を持つ能登最古の酒蔵で有り、また、日本4大杜氏の一つ、能登杜氏発祥の地で、今年の全国新種鑑評会にて通算17回目となる最高位の金賞

を受賞している老舗の酒蔵です。その酒蔵が地域の活性化事業として取り組んでいる事業の一つが平成26年に社会人や学生などに呼びかけて耕作放棄地を復田し、石

川県で新たに開発された酒米「石川門」を作る事業です。この事業を実施することにより、耕作放棄地が減少するとともに新しい酒米「石川門」のを使用した新たな酒造りが始まりました。また、平成27年には地元の中学3年生に呼びかけて、3年生による耕作放棄地を復田した





酒米造りを実施し、取れた酒米「石川門」を醸造し、中学生たちがデザインしたラベルを張った酒瓶に詰めました。この酒はタイムカプセルとなり、廃線となった鉄道のトンネルを改修して作られた貯蔵庫において5年間貯蔵熟成され、中学生が成人式を迎える5年後の成人祝いの

パーティー時にこのお酒で乾杯をすることになっているそうです。この事業を実施していくうちに耕作放棄地だった田圃が徐々に減少するとともに、地酒の新たなブランドが生まれ、地域おこしに役立っているとも話をお伺いできました。

Q：5年間熟成するとより美味しくなるとの事ですが、熟成の仕組みについてお聞かせください。

A：酒造りは、米を溶かしてブドウ糖を作り、ブドウ糖をエサにして酵母がアルコールを作っていきます。その段階で完全発酵させた酒、ブドウ糖を残さずアルコールに変えた酒は熟成すると味が出るが、熟成を中途半端で止めた酒はブドウ糖が残るので、甘くなってしまい、雑味が出るので駄目になります。

Q：日本酒文化の海外における普及状況をどう感じますか

A：海外で作られ販売されている日本酒の中には醸造されたものではなく、単なるアルコールを付け加えて日本酒として販売している粗悪品もあるので、本物の日本酒文化を海外に広めていきたいと思えます。

Q：一般の方を巻き込んで、耕作放棄地に石川門という酒米を植える事業を実施していますが、この事業は毎年実施していますか。また田圃の管理はどの様にしていますか。

A：今年も先週の土曜日に実施しました。毎年大勢の方々が参加してくれます。田圃の管理は、田圃の持ち主さんが行っています。この事業は休耕田を借りて実施しているので、実施していくうちに田圃の持ち主の方も積極的にこの事業に関わっていただくようになり、他の田圃



にも酒米を植えるようになるなど、徐々にこの活動が広がっています。

Q：日本酒造りの後継者をどの様に育てていますか。

A：次世代の担い手として若い蔵人を杜氏にするように先輩の杜氏が教えているところです。当社には親子二代で杜氏をされている方もいます。また、昔の杜氏は季節工でしたが、今は社員として雇用して人材育成しています。

視察先	石川県輪島市		
視察日	平成30年5月23日9:30～		
内容	「本町・朝市通り整備事業」について		
目的	地域住民のワーキング会議を発足し、独特の歴史と文化性を活かしながら電線類の地中化や路面の整備を実施したこの事業の経緯と経過を学び、本市で実施した歴史的まち並み整備事業や中心事業活性化事業、亀城モール事業等の街並み整備事業の取り組みの参考とするため		
説明者	輪島市議会事務局 輪島市建設部土木課	次長兼議事係長 主幹	山田 忠和 林 克彦

「本町・朝市通り整備事業」について

輪島市は能登半島の北西部に位置し、人口27,322人、426.29km²の行政区域の大部分が山林であり、コンパクトな市街地に人口の約半数が集中しています。輪島市の行政視察の項目は「周遊できるまちづくり～本町・朝市通り整備～」に関する事業です。輪島市は観光関連の産業が盛んな市で、平成3年当時は観光入込み数250万人を超えたのをピークに年々減少し、平成13年の鉄道廃線、平成19年の能登半島地震などの影響により、100万人を下回る観光入込み数となりました。



しかし、その後、地域の住民の有志と行政が連携し、周遊できるまちづくりを目指した町並み整備事業を実施し、旧鉄道駅舎を建て替えふらりと訪れ小さな夢を見つけて頂く意味を込めて「ふらっと訪夢」と命名や輪島市出身の漫画家永井豪さんの描いた作品をデザ



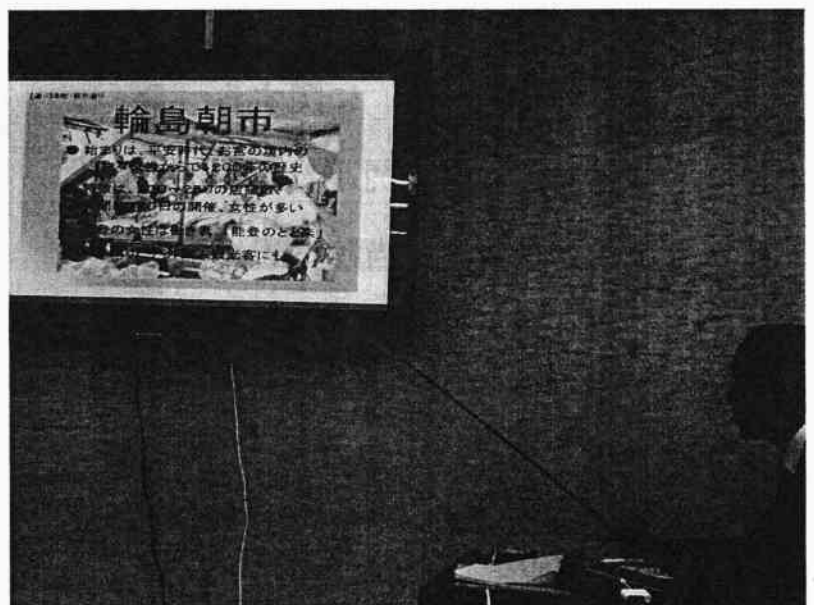
イン化したコミュニティバスを走行させる等の事業を実施しています。また、都市



ルネッサンス事業として、輪島まちづくり協定に基づき、輪島らしさを意識した通りの整備や輪島市の伝統産業の輪島塗職人の多くが居住する上町通り地区では、職住一体の塗師の家のたたずまいを残すために街なみ環境整備事業を実施するなどのまち歩きを促す

整備事業を実施し、今では年間の観光入れ込み数は約100万人、平成29年は1

20万人を超える観光客が訪れています。中でも日本三大朝市の一つに数えられる輪島市の朝市は観光事業の目玉となっています。朝市は平安時代、お宮の境内の物々交換からはじまり1200年の歴史があります。特徴は200から250の店舗が年間340日開催しています。出展者の多くが女性



で、能登の女性は大変働き者で、亭主が楽をしているという意味で「能登のたと楽」と言われているそうです。朝市が開催されている本町・朝市通りは商店街が立



ち並び、商店街組合と朝市組合の二つの団体が利用している通りのため、整備の際には、商店街と朝市出展者と行政が協力し、整備コンセプト、今後の本町・朝市の方向性や路地の活用、工事方法の

調整を行うため、ワーキング会議を実施し、電線の地中化、自然石の石畳、露店のテントを止めるフックの道路設置等々の整備を実施しました。自然石舗装は通行車両により石組みのがたつき対策と毎日工事後に朝市が開催されるので夜間工事でアスファルト舗装と自然石の間にアスファルト系注入材を使用することにより、工事時間の短縮やがたつきが防止されたそうです。朝市を訪れる買い物客の9割が観光客で、近年では外国人観光客が増加しているため、外国人観光客が買い物を楽しめるように、会話シートを作成し指差して買い物が楽しめるような工夫をしているそうです。歴史的町並みを活かした環境整備を実施する上で一番重要な点は、地権者、居住者、そして行政の親密な連携であると再認識いたしました。



主な質疑

Q：朝市通りの環境美化、維持管理についてお伺いします。

A：環境美化は朝市組合として年に数回側溝の掃除などを実施しています。また、出店者の方々に店を片付ける際には清掃をすることを徹底指導しています。

Q：朝市を利用する観光客と地域の方々の割合はどうか

A：観光客が9割で地元が1割程度です。朝市来場者のほとんどが観光客です。

Q：観光客のマナー向上を図る施策はありますか

A：朝市通り基本的に禁煙となっていますので、灰皿を全く用意していません。狭い通りなので喫煙場所はありません。

Q：ワーキング会議の開催実績や話し合われる内容についてお伺いします。

A：月に1回会議を開いています。製品品質の管理や表示、接客の方法等、観光地として遵守しなければならないことを議題としています。それ以外にも行政を含めたパトロールや会議を実施し、観光地としての環境を維持することを務めています。

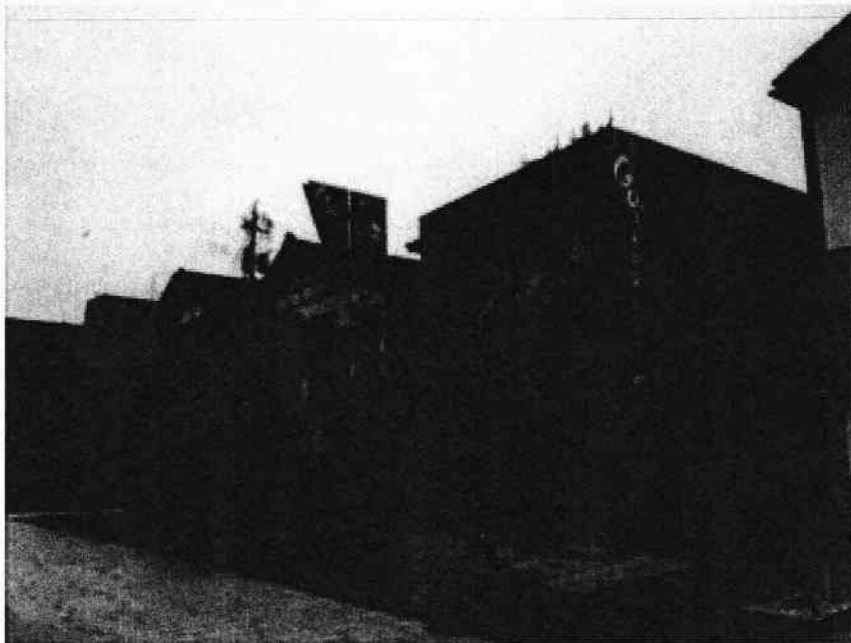


Q：土浦市でも歩いて楽しめる街を目指して環境整備を実施しましたが、車社会のためこの整備が受け入れられないことがありました。輪島市ではどのようにこの整備を実施しましたかお伺いします。

A：商店街の通り整備を始めるときには協定を結んでいます。この事業の同意をいただくにあたっては商店街の中心人物、キーパーソンとなる人物が積極的にこの事業に関わっていただいた経緯があります。地域住民が積極的に事業に関わらなければ事業は成立しません。

Q：まちづくりの協定はいつごろできたのか、またその協定に基づく景観維持等に関する事業の費用は毎年どのくらいかかりますか。

A：協定は整備時期が異なるので、通りの整備事業ごとに作成し締結し、それ以外は景観条例に基づき整備をしています。整備事業のすべてを市で負担することはできませんので、県の国の補助金、交付金を活用して事業を進めています。事業の



のおおよそ半額が補助金や交付金で残りは起債をあて、約1割が市の負担となります。

創政会行政視察 報告書

平成30年5月21日 ～ 23日

内田 卓男

石川県七尾市

石川県珠洲市

石川県宗玄酒造(株)

石川県輪島市

『三世代家族住宅リフォーム住宅奨励金』七尾市

土浦市でも各種助成をしている中で、三世代住宅に対しては現在ない。

これから三世代で居住しようとするケースだけを対象とすることに意味がある。

例にもれず人口減少の波をかぶっている七尾市は29年より交付事業を始めた。

内容は、新たに三世代で同居、準同居を始める世帯や、結婚を機に親と同居、準同居をする世帯で、住居の増改築などの工事をした人に奨励金を交付。

準同居・・・それぞれの建物が直線距離で50m以内に居住していることを言う。

対象世帯は、新たに三世代で同居、準同居をする世帯。結婚を機に親と同居、準同居をする世帯

対象工事は、住居の増改築や改修工事にかかった費用が100万円以上であり、同居、準同居をするための工事であること。

奨励金の額は、50万円。

平成29年度の初年度は、3件の実績。

勿論、所得制限はないが、市税の滞納、未納がないことが条件。

またこの制度は一つの建物、かかわった家族に1回だけで、5年間は建物の売却はできない。

申請手続きを地域工務店がアドバイスや代行をしているという。

定住人口の減少を抑制するのには、大いに期待される制度と思われる。

子育て、介護など、現在の社会環境の中で、自治体としてやれる手軽な制度ではないかと思う。わが市でも検討する要あり。

『ブランド化に向けた取り組み』 珠洲市

能登半島最先端にある珠洲市は、人口14609人で、農林水産業のまちだが、やはり過疎による少子高齢化による人口減少の真ただ中にある。

以前は観光ブームに乗った勢いは全くない。そこで産官学連携事業として、金沢大学と交流事業を進めている。

これまで一部で栽培していた『大浜大豆』を名産品として地域ブランド化への事業とした。

平成11年納豆・寄せ豆腐などの商品化をはじめ、19年には『大浜大豆』をブランド認定した。

並行して、地域振興と都市部との交流促進を図る『狼煙』を建設、治産の商品開発・販売を実施するため、平成21年2億1千3百万円でオープン。

指定管理者として、住民87人が出資した『株式会社のろし』が運営に当たった。

管理料は利益の3割を納付する契約だ。

地域ブランド化が土浦市でも始まったが、未だどう販売していくかの域に達していない。住民主体の自発的取り組みとして、そして行政が介入しないシステムが素晴らしい。

『酒米による地域おこし』 珠洲市 宗玄酒造(株)

創業250年の能登最古の酒蔵。日本4大杜氏で、通算17回目の金賞を全国新酒鑑評会で受賞している。

平成26年から、学生などに呼び掛け、耕作放棄地を復田し、酒米『石川門』を栽培し、新たな酒造りに取り組んでいる。

協力した中学生がデザインしたラベル酒瓶は、酒蔵の裏山にある廃線鉄道のトンネルを貯蔵庫として熟成され、成人式のパーティーで乾杯するという。

田圃は所有する農家が管理、酒米が増産されて、休耕田が徐々に減っている。

土浦市は、酒蔵が伝統的にありません。味噌醤油の産地だったので。

水のせいかもしれません。

地域に合った素晴らしい事業と思う。

『本町・朝市通り整備事業』 輪島市

能登半島北西部人口27322人、424、29km²、大部分が山林。

平成3年をピークに250万人から、23年鉄道廃線、19年能登半島地震の影響か、100万人を下回っている。

その後、官民が連携し、周遊できる街づくりを目指し、本事業に取り組んだ。

旧鉄道駅舎を『ふらっと訪夢』と命名、漫画家『永井豪』デザインのコミュニティバスを走行させた。

都市ルネッサンス事業として、輪島塗職人が居住する上町通り地区では、職住一体の塗師の家のたたずまいを残す環境整備事業、そして街歩きを促進する整備事業を実施し、平成29年120万人の観光客が訪れた。

1200年の歴史ある朝市は観光の目玉で、200から250の店舗が年340日開催。商店街が立ち並ぶ本町朝市通りは商店街組合と朝市組合が利用しているため、行政と協議を進め、電線地中化・自然石石畳・露店テントを止めるフックなどを整備した。

朝市の9割が観光客で、最近では、外国人が増加している。

20年ぶりの輪島市だが、古ぼけた街並みが地域特性を生かしたまちづくりが進んでいるようだった。今回は、昼時で、残念ながら朝市がお休みだったためもあり、人通りが全くないどこにでもある商店街の一面を見た。

いずれまた、朝市の活況の中に来てみたいものである。

土浦市議会創政会行政視察（平成30年5月21日～23日）

創政会 沼田 義雄

1. 石川県七尾市の三世代家族住宅リフォーム奨励金制度

○七尾市の概要

日本海に突き出た能登半島の中央に位置する観光・温泉都市。天然の良港として栄えた七尾港を海の玄関口に、古代から能登の中心地として発展した。基幹産業は水産加工業で、和倉温泉は全国的に知られている。名産品としては、大豆飴、七尾ろうそく、七尾仏壇、田鶴浜建具などがある。なお、「七尾」の名称は七尾城のあった山の7つの尾根に由来していると言われる。

昭和14年（1939年）に七尾町と和倉町の一部などが合併して七尾市が発足したが、平成16年1月、七尾市と近隣3町の合併による新生七尾市が誕生した。

・市勢（平成30年3月末現在）

市域面積318.32㎏ 人口53,404人 世帯22,112世帯

○三世代家族住宅リフォーム奨励金制度について

全国的な人口減少、少子高齢化現象は七尾市においても顕著である。

七尾市の現状は、・総人口は毎年平均800人減少・高齢化率は5年間で5%上昇し35%を超える・0歳～5歳の未就学児が2000人を下回り、少子化傾向が進んでいる以上のようになっている。

このことから、市では定住人口増をはかる目的で、これまでに次の住宅政策を推進して一定の成果をあげてきた。

① 七尾市定住促進住宅取得奨励金…市内で住宅を新築または購入した場合に交付

平成29年度実績 83件 交付金 54,971,445円

② 七尾市賃貸家賃助成金…一定所得に達しない世帯層への民間賃貸物件での家賃補助

平成29年度実績 30件 交付金 3,176,500円

このような現状・政策を背景に、市では平成29年度に新たな定住促進政策として「三世代家族住宅リフォーム奨励金制度」を立ち上げ、目下、市民への周知徹底に努めている。

本制度は、新たに三世代で同居、準同居（夫々の建物が直線距離で50メートル以内に居住）を始める世帯や、結婚を機に親と同居、準同居する世帯が、100万以上の住居の増改築や改修工事を行う場合に50万円を奨励金として交付するもので、対象となる工事には子供部屋や寝室の増築、トイレ、浴槽、台所などの改修が含まれる。

事業創設のねらいは、①移住・定住人口の拡大 ②同居による子育て支援の体制づく

り ③高齢者が安心できる住環境の提供 ④若者が定住し、活気ある地域づくりなど世代間の助け合いにつながる の4点である。

ちなみに、七尾市の三世代家族の状況は平成27年度国勢調査による総世帯数20,781世帯のうち、2557世帯の約12%が三世代家族。本制度の利用頻度がどの程度になるか、注目したい制度である。

2. 石川県珠洲市のブランド化に向けた取り組み

○珠洲市の概要

石川県の北西部、能登半島の先端に位置する。当市は、本州にある市の中で最も人口が少ない市で、地場産業の農林水産業も過疎化と少子高齢化による後継者不足で停滞気味である。

それでも、近年は豊かな自然環境一里山里海が見直され、伝統文化や祭りの継承、揚浜製塩業や珪藻土七輪など珠洲固有の地域資源の有効活用などで、市の魅力の発信と人口の拡大を図っている。

昭和29年(1954年)、珠洲郡の3町6村が合併して、石川県下5番目に市制を施行して珠洲市が誕生した。

特産品は、珠洲焼(中世の珠洲焼陶器を昭和45年頃に復活)、珪藻土七輪・コンロ、天然塩、竹筆、本炭などがある。

・市勢(平成30年3月31日現在)

市域面積247.20㎢ 人口14,625人 世帯5,861世帯

○ブランド化に向けた取り組みについて

・世界農業遺産(GIAHS)認定「能登の里山里海」

平成23年6月、中国北京で開催された国連食糧農業機関(FAO)主催の国際フォーラムにおいて、珠洲市を含む奥能登4市4町をエリアとする「能登の里山里海」が「世界農業遺産(GIAHS)」に認定されました。認定は世界で9番目、国内では初めてである。地域で受け継がれてきた美しく豊かな里山里海と、それに基づく生業・ライフスタイル・伝統文化・景観・生物の多様性などに対して大きな賞が贈られたものであり、珠洲市では市独自のブランド化に向けた取り組みを積極的に進めている。

・珠洲市のブランド化への取り組み

能登半島先端の狼煙では、在来種の大豆「大浜大豆」を地域の活性化に活かそうと豆腐や豆乳ソフトクリーム、おからドーナツなどを製造販売しているほか、次のようなブランド化への取り組みをしている。

(イ) 地元ではほぼ全世帯が出資して「株式会社のろし」を設立

(ロ) 半島先端の観光地「禄剛埼灯台」近くの「道の駅狼煙」を運営

- (ハ) 道の駅では大浜大豆使用の豆腐等の商品のほか、地元産野菜・山菜・海産物等の食材を販売
- (ニ) 大浜大豆の豆乳、市内に伝わる揚げ浜式製塩の過程でできた「にがり」を使った豆腐作り体験を実施
- (ホ) 地元高齢者の生き甲斐創出に一役

・宗玄酒造のブランド化の取り組み

宗玄酒造（珠洲市宝立町）は、江戸時代中期の明和5年（1768年）創業以来250年の歴史を有する能登半島最古の酒蔵で、日本四代杜氏の一つ。能登杜氏発祥の地である。宗玄大吟醸は、全国新酒鑑賞会において最高位の金賞を17回受賞している。

- (イ) 地域活性化に向けて、エコな自然エネルギーの活用のため、廃線になった「のと線」を活用。自然エネルギーを使った天然冷蔵庫で貯蔵（トンネル貯蔵酒）している。熟成酒のオーナー制度も実施中。
- (ロ) 平成25年、廃線跡に線路を敷設し、奥のとトロッコ（愛称のトロ）を運行。地域の活性化でグッドデザイン賞を受賞。
- (ハ) 平成27年から地元の中学校に呼びかけて3年生による酒米造り、稲刈り、ラベルづくり、また成人式に乾杯するまで宗玄で5年間熟成させるタイムカプセルを行っている。
- (ニ) 平成27年10月、ミラノ万博・世界農業遺産ウィークに参加。オープニングの乾杯酒に宗玄純米大吟醸が採用された。これを機にヨーロッパ市場開拓を開始した。

3. 石川県輪島市の本町・朝市通り整備事業

○輪島市の概要

能登半島北部の奥能登の中核に位置し、輪島塗や朝市、御陣乗太鼓、千枚田などで全国的に有名である。古くから港町として知られ、中世には三津七湊という日本を代表する港の一つとなり、北前船の寄港地であった。

現在は、輪島塗や朝市に代表される豊富な観光資源により、一年と通して多くの観光客が訪れ、観光関連の産業が盛んである。朝市通りをはじめ市内各地には漆器店、飲食店、ホテルなどが軒を連ねる。

漁業も盛んで一年を通して豊富な魚介類の水揚げに恵まれ、輪島港の水揚げ高は石川県随一となっている。特にズワイガニの水揚げ量は日本海側の港の中でも有数で、冬季の貴重な観光資源となっている。また、輪島の海女（あま）は約200名で、一地域の海女の数としては世界一である。平成2年～3年のピーク時には7～9月の3ヶ月間で、アワビ約40トン、サザエ約280トンの漁獲があったという。

主な見学地として、輪島工房長屋、石川県輪島漆芸美術館、輪島塗会館、輪島キリコ

会館、白米千枚田、曾々木海岸、琴ヶ浜海岸など、史跡旧跡は上時及び下時国家、総持寺祖院（旧曹洞宗大本山）などがある。

昭和29年（1954年）3月、輪島町など1町6村の合併により輪島市が発足、平成18年（2006年）2月には輪島市と門前町の合併で現在の輪島市となった。

・市勢（平成30年4月1日現在）

市域面積426.32㎢ 人口25,563人

○本町・朝市通り整備事業について

輪島市は極めて小さな市街地で、都市計画区域は行政区域の約3%である。コンパクトな市街地に総人口の約半分が集中している。

市では、より魅力的で周遊しやすいまちづくりに向けて、市街地の整備事業を進めており、その一つが本町・朝市通り整備事業である。事業開始に際しては、地元住民中心のワーキング会議を立ち上げ、行政や専門家を交えて意見交換を行っている。

この地区は、朝市と商店街が共存している特殊な道路の活用形態であり、歴史・文化面での独自性を生かしつつ、電線の地中化や路面整備を行っている。即ち、路面をさくらと黒の御影石で色分けして、午前は露店、午後は歩道としての利用といった配慮をしている。

今後も、市では本町商店街を朝市組合との連携を強化しながら、魅力・にぎわい・文化が香る、本物に出会えるまちをつくる取り組みを進める方針である。

〔所感〕本州に属する三市であるが、それぞれ人口規模からみても小都市の観は否めない。

それでも地域の特性をいかして、全国に我が市を発信しようとする意気込みは立派であると感じた。

特に、人口減少に歯止めをかけるべく定住策を次々と立ち上げる七尾市の取り組みに注目した。今回の三世代家族住宅リフォーム奨励金制度は、果たしてどのような成果を得るだろうか。

人口減少の問題は土浦市でも深刻である。ぜひ、年度ごとでも結果を知りたいものである。

土浦市議会 創政会 行政視察 感想 矢口 迪夫

石川県七尾市・珠洲島市・輪島市(平成 30 年 5 月 21 日～23 日)

1 七尾市

- ・三世代家族住宅リフォーム奨励金について

過疎化に対する七尾市の施策として、三世代での同居を新たにされるときに住宅リフォーム奨励金はとても良いと思われれます。土浦市にとっても、あったら良いなどと思われれます。

2.珠洲市

- ・ブランド化に向けた取り組みについて

珠洲市にとっては鉄道の廃止が、観光産業を衰退させました。観光産業に依存しすぎて、ブームが去ると大変難しい状況になってしまうということです。

こういったことを教訓に土浦市も日頃から、町おこしとか産業の開発を怠ってはいけないということだと思います

- ・酒米による地域おこしの取り組みについて

地元の酒米による地酒があると良いですね。土浦市でも地元産のコメを使った地元ブランドの酒を造って、乾杯条例も作りたいですね。土浦市にもそのような施策をとってほしいものです。

3.輪島市

- ・本町・朝市通り整備事業について

輪島市は、過疎地ということを含みに、市議会も商店街も市民も同じ考えで、他市とくらべ、輪島市の良さを売り出している。便利さだけでなく、他とは違い、日本でただ一つになることを、目的として、まちを整備しているので集客もされるということです。行政も市民も商店街も市議会も一体となって、まちづくりを進めるのが大事だと思います。

視察日：平成30年5月21日（月）～5月23日（水）

創政会、七尾市、珠洲市、輪島市行政視察に於ける感想

報告者 創政会 矢口 清

七尾市行政視察

七尾市は北陸地方の西部に位置する市で、石川県能登地方の中心市である。日本で最大規模の山岳城「七尾城」が築かれていた城山に七つの尾根（松尾、竹尾、梅尾、鶴尾（菊尾）、亀尾、竜尾、虎尾）があったのが「七尾」の名の由来とされています。

平成16年10月1日、「港と温泉のまち 七尾市」・「建具のまち 田鶴浜町」「演劇のまち 中島町」・「観光の宝島 能登島町」の1市3町が合併し新七尾市が誕生しました。

広域的な観光地域づくりによる交流人口の拡大に取り組むと共に、新たな企業誘致や地場産業の振興による産業・経済活動の更なる活性化を図り、働く場を確保・創出します。

子育てや教育環境の充実を図ると共に、自助・共助・公助の役割分担により、市民一人ひとりが安心して安全に暮らす事ができるまちをつくります。

1. 人を呼び込む新たな魅力づくり
2. 活力あふれる地域産業づくり
3. 子育て環境の充実と次代を担う人づくり
4. 支え合いのネットワークづくり

以上の4項目が七尾市の概要に書かれてあった。

平成29年度より導入した「三世代家族住宅リフォーム奨励金」交付事業について学びました。

人生100年時代と言われ、団塊世代が年齢を重ねて行く今こそ改めて家族の絆を大切に感じ、互いに支え合いながら一緒に、また近くで暮らすという選択をする家族のきっかけとして取り組んだ。

近年は、次世代の担い手が転居や転出をした事による中心市街地の空洞化や新たに造成される郊外型住宅地などの影響で高齢者のみの世帯や空き家が増加傾向にありました。

「三世代家族住宅リフォーム奨励金」制度が創設されるまでは、福祉分野を除くと住宅リフォームに特化した補助制度はなく、従来からある地域に若者や子育て世帯を呼び戻すための支援策が検討されました。事業を創設するにあたっての狙いは、次の4つとしました。

1. 移住・定住人口の拡大
2. 同居による子育て支援体制づくり
3. 高齢者が安心できる住環境の提供
4. 若者が定住し、活気ある地域づくりなど、世代間の助け合いにつながる

予算額は、七尾市だけで定住促進に5、000万円になるので、100件分となります。その中でやりくりしますので問題はないです。多額の予算となりますが、それでも定住人口が増えれば良い。

珠洲市

珠洲市は能登半島の先端に位置し、人口14,609人である。地場産業は、小規模な農林水産業だが、過疎化、少子高齢化の進行が著しく後継者不足となっている。しかし、近年では、豊かな自然環境による里山里海が見直され、各地域に伝わる「伝統文化」や「祭り」の継承や、楊浜製塩業や珪藻土七輪など、珠洲固有の地域資源を有効に活用し、また、産官学の提携事業として、国立金沢大学との交流事業を積極的に進め、珠洲の魅力の発信と交流人口の拡大を図っている。また、平成29年から10月にかけて開催された奥能登国際芸術祭では、市内外含め、7万1千人余りの方々が来場された。

珠洲市は、高齢化率47.8%、高齢化人口6,987人のまちで有る。珠洲市が取り組んだのは、地域で取り組んでいた大浜大豆を活用したブランド化の取り組みです。平成11年より寄せ豆腐やっと納豆などの大浜大豆を加工した商品化が始まり、平成19年に「大浜大豆」ブランド認定いたしました。

平成21年3月に、この「大浜大豆」等の地域固有の資源を活かした振興と都市部等との交流促進を図るために、道の駅「狼煙」（のろし）を建設した。

利益が上がった場合に30%を市に納付することになっています。

平成21年から入込数3万人を超え、年々来場者を増やし、順調に利益を

上げているそうです。

道の駅はやり方によっては、地域の活性化に役立つと実感した。

輪島市

「周遊できるまちづくり～本町・朝市通り整備～」に関する事業です。

電線の地中化、自然石の石畳、露店のテントを止めるフックの道路設置等々を実施しました。

朝市を訪れる人の買い物客の9割が観光客で、近頃は外国人観光客が増加している。その為、外国人が指さしで買い物が楽しめる様に工夫している。

歴史的町並みを生かした環境整備を実施する上で一番重要な点は、地権者、居住者、そして行政の親密な連携で有ると再認識した。

震災前に輪島市を訪れたことがあった。その時は輪島の朝市はやっていたので相当数の人が出ていた。視察当日は朝市が休みだったので商店街は人通りがなく閑散としていた。

ピーク時は270万人であるから、今は当時の半分である。

近年は、多少回復傾向にあるがまだまだ回復と途上である。回復傾向にあるのもアベノミクスによるものだと思う。

輪島市には、道の駅が3か所ある。

1. 道の駅 輪島 ぷらっと訪夢
2. 道の駅 千枚田ポケットパーク
3. 道の駅 のと里山空港



いずれも大変な賑わいである。

輪島市の伝統産業である輪島塗は、室町時代より北前船とともに栄え、現在に至っています。これらの職住一体の塗師の家のたたずまいが今でも残っている唯一の地区で有り、塗師の家にふさわしい建築様式で街並みが形成されてきた地区です。また、大正から昭和初期の建築物も多く残り、細い路地も多く、特徴ある風情を醸し出しています。

漁業も盛んであり、暖流と寒流が交わる沖合の天然礁の好漁場により1年を通じ豊富な魚介類の水揚げに恵まれ、輪島港の水揚げ高は県内一となっている。

輪島港は冬場にはズワイガニの水揚げ量も県内一で有り、さらにこのズワイガニの水揚げ量は日本海側の港の中でも有数のものとなっていて冬期の貴重な観光資源ともなっており、このために遠く関東、関西からも観光客が訪れている。天然フグの水揚げが2015年度では440ト^ンで日本一となっており、「輪島ふぐ」として商標登録されている。輪島の海女は、日本海のアワビやサザエ、海藻などを伝統的な素潜りの形態でとる魚を行なうが、1990年から1991年のピークには、7、8、9の3か月でアワビ約40トン、サザエ約280トンの漁獲があった。また輪島の現役海女の数は10代から70代迄の200人程になっており一地域の海女の数としては世界1となっている。平成26年6月、石川県無形民俗文化財に指定された。

以上で視察報告を終わります。

市議会議員 様

土浦市議会議員 川原場明朗

平成30年度創政会行政視察研修感想報告

1. 視察先：石川県七尾市

- ・日時：平成30年5月21日（火）13:00時～
- ・視察内容：『三世代家族住宅リホーム奨励金』について

・視察感想

急激な少子高齢化と人口減少の課題は、多くの地方都市が様々な施策にとり組んでおり、この人口減少には、社会減・自然減による人口減少がありますが、この両面からの対策が求められているところです。今回は、この社会減と自然減両面の対策として、定住人口増加、少子化対策、高齢者対策、子育て支援対策などを念頭に置いて、3世代家族住宅リホーム奨励金を平成29年度から導入し、人口減少に歯止めをかける施策に取り組んでいる七尾市を研修視察してきました。

今般の3世代家族の住宅リホーム奨励金(100万円以上の工事に対する50円の奨励金)は、核家族化に歯止めをかけ、親から子への世代を超えて、若者が定住し、活気ある地域づくりと同時に、祖父から孫までは同居して生活することによって、家族の絆を深め、子育てと高齢者の介護に関わる課題を同時に支援することができる施策として、取り組んでおり、私もこの施策は定住促進に有効ではないかと思いました。本市としても、様々な角度から検証し、導入の検討に値する内容ではないかと思しますので執行部としても検討願いたいと思います。

2. 視察先：石川県珠洲市

- ・日時：平成30年5月22日（水）午前9時30～・13:00～
- ・視察内容：『ブランド化に向けた取り組みについて』・『酒米による地域おこし』について

・視察感想

視察先のブランド化に向けた取り組みは、行政の支援を受けながらも、地域住民の有志が、地域固有の資源を活かして、地域の振興と都市部との交流促進を図ることをコンセプトに、『大浜大豆』ブランドを立ち上げ、生産から販売まで一貫して主体的に管理運営に当たっていることが、成功に導いているのだと感じました。本市においても、土浦の地域固有の資源や生産量日本一の蓮などを素材として、ブランド化に向けた取り組みが、地域住民から立ち上げようとする話が持ち上がり、地域住民が主体的に取り組む計画・創生が醸成される環境整備が必要ではないか。また、そうした考えが醸成される動機付けの支援体制も必要ではないかと感じました。また、『酒米による地域おこし』については、地域の250年わたる歴史をもつ能登最古の酒造会社と耕作放棄地を復田することを結び付けて、石川県で新たに開発された酒米『石川門』を作る事業として「新たな酒造りを始めるきっかけを創り出し、地域おこしの起爆剤としたことは地域の皆さんの結集と何とかしなければとの思いでたどり着いた事業であると感じました。本市においても、地域の様々な素材を利用して、他に負けないものを見つけ出して、地元のブランド化を推進し、何とか『まちおこし』に結び付ける努力が必要であると感じました。

3. 視察先：石川県輪島市

- ・日時：平成30年5月23日（木）午前9時30～
- ・視察内容：『本町・朝市通り整備事業』について
- ・視察感想

視察研修先の輪島市のように、主に観光客を対象とすることは、難しいと思いますので、地域の地産地消の観点から、中心市街地の地域住民と周辺の農家が作る農産物の直売所の位置づけに加えて、歴史的町並み整備事業の充実と騎乗モール事業を観光ルートとしての構築を図り、観光客を呼び込める施策を念頭において、点としての計画ではなく面的なとらえ方での構想で事業を進めることが課題であると感じました。多面的な観点から考えて行くことが必要ではないかと思いました。

以上行政視察の感想を報告いたします。

創政会視察報告書 海老原 一郎

平成30年5月21日～22日

1. 石川県七尾市 三世代家族住宅リフォーム奨励金について

・七尾市は、三世代家族住宅リフォーム奨励金の他に、定住促進住宅取得奨励金、移住定住促進住宅取得補助金、まちなか居住再生事業など、人口減少・高齢化を食い止めるため、様々な定住・移住対策の住宅施策に取り組んでいました。それは、やはり雇用先が少ないことに要因があるようです。土浦市でも、雇用先を増やす施策を検討するとともに、定住・移住対策として、住宅政策も検討すべき課題である。

2. 石川県珠洲市 ブランド化に向けた取り組みについて

・市制施行した昭和29年7月には38,000人の人口が平成30年3月には14,600人に減っている。能登半島の先端に位置し、観光客の減少により、飲食店や宿泊施設が廃業し、過疎化・少子高齢化がどんどん進んでいる中で、大浜大豆という地域固有の大豆を復活させブランド化し、それを活用した交流施設「狼煙」の建設までに至った。土浦市でも、土浦ブランドを立ち上げましたが、その後のフォローが大切だと思いました。

3. 石川県宗玄酒造（株） 酒米による地域おこしの取り組みについて

・土浦市では、酒の醸造会社はありませんが、民間の酒販売店が農家に栽培を委託した酒米を、酒造会社に醸造を委託しています。耕作放棄地での栽培を提案しようと思います。

土浦市議会 創政会 行政視察感想 小坂 博

石川県七尾市・珠洲 市・輪島市(平成 30 年 5 月 21 日～23 日)

1 七尾市

・三世代家族住宅リフォーム奨励金について

鉄道の廃止という中で、過疎化に対する七尾市の施策としては、三世代での同居が少ない中努力されていることには、敬服いたします。しかしながら、この程度のことでは抜本的な効果は上げられないように思います。土浦市にとっては、あったら良いなという程度の施策と思われます。

2.珠洲市

・ブランド化に向けた取り組みについて

珠洲市にとっての最大課題は交通アクセスだと思われれます。観光を柱にした産業は鉄道の交通アクセスが死活的に大事だということではないのか、また観光に依存しすぎるとブームが去った時に大変難しい状況になってしまったということです。土浦市も日頃から、工場誘致とか産業の開発を怠ってはいけないということが

教訓になると思います

・酒米による地域おこしの取り組みについて

地元の酒米による地酒は素晴らしいと思いました。土浦市でも地元産のコメを使った地元ブランドの酒を造って出してほしいですね。ぜひ土浦市にもそのような施策をとってほしいものです。

3.輪島市

・本町・朝市通り整備事業について

輪島市は、過疎地ということ逆を強みとして、方向性、予算も市議会も商店街、一般市民も同じコンセプト、同じ考えの元、他市との差別化を図り、輪島市の良さを全面的に売り出している。また輪島市行政のまちづくりの担当者もそれをよく理解し、適切な施策を講じているように見えました。単なる便利さ、アクセスの良さ、ショッピングの集客だけを考えるのではなく他市との差別化を図り、日本の中で唯一なるものを、施策として、まちも整備している素晴らしい事業でした。

土浦市にとっても、意見の集約に時間がかかるとか、そもそも目標とすべき統一された目標などあるのかとか、問題はあると思いますが、行政も一般市民も商店街も商店主も市議会も一体となって、まちづくりを進めれば、必ずや成功すると思います。

七尾市行政視察

土浦市議会会派創政会にて石川県七尾市で平成29年度より導入した「三世代家族住宅リフォーム奨励金」交付事業について学びに来ました。今後のこの事業の取り組みとして、単に住宅リフォームのための補助事業ではなく、人生100年時代と言われ、団塊世代が年齢を重ねていく今こそ改めて家族の絆を大切に感じ、互いに支え合いながら一緒に、また近くで暮らすという選択をする家族のきっかけとして取り組んでいくそうです。定移住人口増加、少子化対策、高齢者対策、子ども子育て対策などなど、多方面に良い結果を得られる可能性があるこの事業の進行状況を注視し、土浦市でも取り入れられる点を考え、政策として提言することを検討していきたいと思います。

追記：七尾市の道の駅で見つけた「いしかわ里山里海サイクリングロード」スタンプラリーチェックポイントの看板です。QRコードも有り、なんだか楽しそうです。土浦市のサイクリング事業にも導入したら楽しく盛り上がるのではないかと思います。

珠洲市行政視察

会派の行政視察二日目は珠洲市にてブランド化に向けた取組です。珠洲市が取り組んだのは、地域で栽培されていた大浜大豆を活用したブランド化の取組です。地域固有の資源を活かした振興と都市部等との交流促進を図るために、交流施設「狼煙」を建設し、地物を利活用した商品開発、販売などを実施する計画を策定し、平成21年3月に総事業費2億1千3百万で施設を完成させ、同年4月29日にオープン、運営は地域の住民有志87人が出資者となり出資金380万円にて設立した「株式会社のろし」が指定管理者として管理運営しています。株式会社のろしの代表で道の駅狼煙の駅長である新さんに設立当時のご苦労や運営の取組について直接お話を聞く機会を設けていただいたことは大変参考になりました。

午後からは1768年創業の宗玄酒造さんが取り組んだ「酒米による地域おこし」を学ぶために宗玄酒造へ、代表取締役の徳力社長さんからお話をお伺いします。宗玄酒造さんの取り組みの一つが平成26年に社会人や学生などに呼びかけて耕作放棄地を復田し、石川県で新たに開発された酒米「石川門」を作る事業です。また、平成27年には地元の中学3年生に呼びかけて、3年生による酒米造りを実施し、取れた酒米にて酒を作り、酒瓶のラベルは中学生たちのデザインによるものです。この酒は5年間貯蔵熟成されるタイプカプセルとなり、中学生が成人式を迎える時にこのお酒で乾杯をすることになっているそうです。この事業を実施していくうちに耕作放棄地だった田圃が減少し、地酒の新たなブランドが生まれ、地域おこしに役立っているとも話をお伺いできました。民間事業者が先行して取り組んでいる二つのブランド化事業のお話を聞き、土浦市で現在取り組んでいるブランドアップ事業を成功させるためのヒントをいただきましたので、これから執行部に対して政策の提言していきたいと思います。

輪島市行政視察

輪島市の行政視察の項目は「周遊できるまちづくり～本町・朝市通り整備～」に関する事業です。輪島市は観光関連の産業が盛んな市で、平成3年当時は観光入込み数250万人を超えたのをピークに年々減少し、平成13年の鉄道廃線、平成19年の能登半島地震などの影響により、100万人を下回る観光入込み数となりました。しかし、その後、地域の住民の有志と行政が連携し、周遊できるまちづくりを目指した町並み整備事業を実施し、旧鉄道駅舎を建て替えふらりと訪れ小さな夢を見つけて頂く意味を込めて「ふらっと訪夢」と命名や輪島市出身の漫画家永井豪さんの描いた作品をデザイン化したコミュニティバス走行を実施しています。朝市が開催されている本町・朝市通りは商店街が立ち並び、商店街組合と朝市組合の二つの団体が利用している通りのため、整備の際には、商店街と朝市出展者と行政が協力し、整備コンセプト、今後の本町・朝市の方向性や路地の活用、工事方法の調整を行うため、ワーキング会議を実施し、電線の地中化、自然石の石畳、露店のテントを止めるフックの道路設置等々の整備を実施しました。自然石舗装は通行車両により石組みのがたつき対策と毎日工事後に朝市が開催されるので夜間工事でアスファルト舗装と自然石の間にアスファルト系注入材を使用することにより、工事時間の短縮やがたつきが防止されたそうです。朝市を訪れる買い物客の9割が観光客で、近年では外国人観光客が増加しているため、外国人観光客が買い物を楽しめるように、会話シートを作成し指差しで買物が楽しめるような工夫をしているそうです。歴史的町並みを活かした環境整備を実施する上で一番重要な点は、地権者、居住者、そして行政の親密な連携であると再認識いたしました。

創政会行政視察における感想
石川県七尾市・珠洲市・輪島市
平成30年5月21日(月)～5月23日(水)

下村 壽郎

・5月21日 石川県七尾市

「三世代家族住宅リフォーム奨励金」について

七尾市は、毎年平均約800人が減少している。高齢化率は平成29年35.4%となっている。0歳児から11歳までの人口が毎年減少している。

生まれ育った地域には、若者が思うような雇用先がない等の人口流出の現状がある。少子高齢が進む中で地域を担う若者が定住するために、「三世代家族住宅リフォーム奨励金」の制度が導入された。

- ① 新たに三世代同居を始める場合
- ② 結婚を機に親と同居する又は準同居する場合

三世代家族による期待できる効果の中で

同居による子育て支援

高齢者が安心できる住環境

に注目をしました。同居することで子育て支援や経済的にも心理的にも助け合い、家族の絆が深まり、地域社会も良くなると思います。

都市化されつつある土浦市では、三世代家族が同居する条件が整うには難しいと思われませんが、農村部では条件に適する家庭があると思います。

土浦市でもこのような施策の導入ができるのか今後の検討課題としてまいりたいと考えます。

・5月22日 石川県珠洲市

「ブランド化に向けた取り組み」について

- ① 珠洲市役所にて珠洲市の概要について説明を受けました。

市長は、豊かな自然環境による里山里海が見直され各地域に伝わる「伝統文化」や「祭り」の継承や、揚浜製塩業や珪藻土七輪など、珠洲固有の地域資源を有効に活用し、珠洲市全体をブランド化したい意向で市政運営をしているそうです。

次に、道の駅 狼煙 現地で

- ② 「大浜大豆を活用したブランド化の取り組み」について

道の駅 狼煙では大浜大豆の豆腐、豆のドーナツ、豆乳ソフトクリームなどが人気商品となっている。

大浜大豆を復活させ地域ブランドとするため大浜大豆の加工・商品化に取り組み寄せ豆腐・つと納豆を商品化した。

その後、大浜大豆など地域固有の資源を生かした振興に取り組み、珠洲市では交流施設「狼煙」を建設し、施設の運営は民間事業者の（株）のろしが指定管理者となっている。

道の駅「狼煙」では里山里海の食材提供及び販売をして、地域農産物や加工商品(大浜大豆の豆腐、解散加工品などの販売額は、平成28年度34、268千円で地域の生産者さらに地域社会へ大きく貢献していました。

珠洲市は、地域固有の資源を生かした振興に取り組み、大浜大豆を復活のきっかけづくり、交流施設「狼煙」を建設し（株）のろしの事業立ち上げのきっかけを仕掛けたように感じました。

土浦市では、農産物の6次化に向けた取り組みを積極的に行っていますが、生産者は事業化や販売には積極的ではありません。何かのきっかけを市が進めることが有効だと感じました。

・5月22日 石川県珠洲市

宗玄酒造（株）「酒米による地域おこし」について

蔵元が社会人や学生などに呼びかけ耕作放棄地を再生し酒米をつくる事業に取り組み耕作放棄地の解消、地域おこしなど地域社会に貢献している。

平成26年度から開始して、社会人や学生に呼びかけ

平成27年度には地元の中学3年生に呼びかけ

宗玄酒造（株）は老舗の蔵元として歴史と伝統があるが、能登最古の酒蔵としての誇りが、酒造りだけではなく地域社会への貢献を「酒米による地域おこし」として具体化したと感じました。企業が行う素晴らしい社会貢献事例でもあります。

・5月23日 石川県輪島市

「本町・朝市通り整備事業」について

輪島朝市は、平安時代、お宮の境内の物々交換からで1200年の歴史があり、観光客入込数は昭和55年270万人、平成3年256万人、平成13年は鉄道廃線があり鉄道駅がない観光地となり激減120万人となってしまった。

平成19年は能登半島地震により90万人となった。

このため、周遊できるまちづくりをめざして通りの整備を開始した。

鉄道駅廃止後旧鉄道駅舎を建て替え道の駅 輪島（ふらっと訪夢）を開設。コミュニティバスの運行（3路線）旧駅前の整備をした。その後、通りの整備を開始し、①ルネッサンス事業では街並みの整備で建物の建て替えは通りから1mのセットバックをして通りの整備を行った。市民と一体となった整備を行い整備後は賑わいを取り戻した。次に②上町通りの整備、③河原田川沿い整備が行われた。

この整備後は、朝市を生まれ変わらせようと地元の組合と輪島市がタッグを組み、組合（朝市組合と商店組合）と行政がワーキング会議を月1回で27回の会議を行った。

通りの整備は、自然石舗装を行い工事中は朝市が1日も休まず工事を行った。

電線類の地中化も併せて整備し通りには開放感が生まれた。

輪島市の「周遊できるまちづくり」は、市民と市が一体となり整備をした成功事例でした。

土浦市が参考にする素晴らしい事例と思いますが、土浦市の中心市街地を良くするとの思いが市民と行政が一体とならないと出来ないと考えられます。輪島市は朝市を中心とした観光で成り立ち、観光客入数の増減を市民が常に感じ取り、何か危機感を共有したと感じました。土浦市も中心市街地のみなさんと行政が危機感を共有しつつ整備に向けた協議が必要と考えられます。

「三世代家族住宅リフォーム奨励金」について

実はわたくしは現在、娘が建築した三世代住宅に同居をしております。孫が生まれ、娘夫婦と共に孫の成長を身近に見る事ができ、幸せな生活しております。娘は二人目を身ごもり、もう少しで家族が一人増えるという事で、これほどの喜びはありません。この勢いで行くと、三人目、四人目と産んでくれる可能性があると思っています。出来るだけ子育てに協力し、「じいじ」としての役割を果たして行きたいと思っています。

今回、七尾市の例を見ますと、交付要綱は「新たに三世代で同居、準同居を始める世帯や、結婚を機に親と同居、準同居する世帯が、100万円以上の住宅の増改築や改修工事を行う場合に50万円を奨励金として交付します。」という事です。これは緩やかな奨励金だなと思っています。また、申請などの手続きは地域の工務店など建設業者がアドバイスや代行を行う事でこの制度を利用する方の負担を軽減し、三世代同居を前向きに考える事が出来るのではないかと思います。

土浦市でも柔軟な補助金制度を取り入れれば、一人暮らしの高齢者の減少、子どもの増加につながるのではないかと思います。

「ブランド化に向けた取り組み」について

石川県珠洲市は能登半島先端に位置し、人口が 14,609 人と少子高齢化の進行が著しく後継者不足となっております。しかし、もともとあった従来種「大浜大豆」を市の名産品として活用する為に大浜大豆の生産を復活させ、地域ブランド化に成功しております。

土浦市ではブランド化された農産物はいくつあるでしょうか。と考えると、レンコンは日本一位の生産量を誇るブランドではあるが、その加工品を考えるとレンコン麺以外には考えられません。

私の住む右粍では、元々、ツェッペリン号が来た時に作ったカレーの中に入っていたジャガイモ、そして東京の大田市場で人気の甘い白菜があるが、圧倒的なブランドではなく、農家の方の努力による商品として取り沙汰されてはいますが、それからの加工品はほとんどないと言っていいと思います。

今、六次化産業として土浦独自の商品の開発が急がれていると思います。日本で 2 番目の農業生産県として利益の出る商品の開発が必要だと思っておりますので、ぜひ参考にしたいと思います。

石川県珠洲市 宗玄酒造(株)「酒米による地域おこし」について

我が市土浦では残念ながらお酒を造る会社がありませんが、かつて市内には酒蔵があったと聞いたことがあります。

もし、酒蔵があったらどんなに誇りになったかなと思います。

石岡でもつくばでもおいしいお酒を造っております。

宗玄酒造の始祖は戦国時代の能登官僚七尾城主・畠山義春の一族。江戸中期の明和5年(1768年)創業以来250年の歴史をもっています。ご先祖代々続けるという事はとても大変な事だと思います。また、今年の全国新種鑑評会にて通算17回目となる最高位の金賞を受賞していると聞いております。これは信じられないくらい素晴らしい事です。

尚且つ、石川門という酒米の生産をする事で農業と酒蔵が一体となり、この地域一帯に富をもたらし、この地域の繁栄となった事は、まさに六次化産業の先駆的なものだと思います。

土浦では柴沼醤油さんは400年の歴史を有し、日本はもとより世界に打って出ています。こういう会社を守り、育てていくことが自治体としても必要であり、地域の宝として守り育てる事が必要だと思います。

「本町・朝市通り整備事業」について

輪島の朝市。それは私達が子供の時から能登半島の名物として聞き及んでいます。その朝市が最初に立ったころは男手で獲ってきた魚を奥さんが並べて細々とお金にしたり、物々交換をしていたと思います。

しかし現在では能登半島では、なくてはならない生活に根付いた一つでもあり、また観光資源にもなりました。

私達土浦市では私が子供の時、番重を自転車の後ろにつけたおじさんがウナギ、シジミ、淡貝を持って売りに来ていました。みんな霞ヶ浦で獲れたものだと言っておりました。

私は何回もウナギを食べさせていただきましたが、とてもおいしかったです。また、母が作ってくれた淡貝と切り干し大根の煮物は今では食べる事の出来ない心に残る食べ物です。出来ればもう一度食べてみたいと思います。

霞ヶ浦は昔は汽水湖であり、今よりいろんな種類の貝や魚がたくさんとれたと聞いております。もし、以前のように汽水湖だったら今でもいろんな魚や貝が取れて朝市がたったのではないかと思うと残念です。

土浦市にはアルカス土浦前の広場や、うらら広場、モール 505 という素晴らしい場所があります。地域住民の方と協力をし、週末だけでも農産物や加工品等を扱う朝市、軽トラック市等を開催出来れば駅周辺が賑わい、活気づくのではないかと思います。

以上で報告とさせていただきます。

- ・石川県七尾市「三世代家族住宅リフォーム奨励金」について

平成 16 年の合併時、63,761 人いた人口が今年現在 53,404 人と毎年約 800 人前後の人口減少、さらに高齢化率が 35.5%と少子高齢化が顕著な事から、これまでは福祉分野にしかなかった住宅リフォーム制度だけではなく、若者や子育て世代が七尾市に定住する狙いとして始められた制度である。

土浦市でも中心市街地活性化や定住人口増加などのリフォームに関する助成はあるが、三世代同居に特化した助成制度はなく非常に興味はあるが、地域環境（就業環境・学校・交通等）に大きく左右され、また、100 万円以上のリフォームに限られる事から細分化の検討も必要と考えられる。

- ・石川県珠洲市「ブランド化に向けた取り組み」について

能登半島の最先端に位置する地理的ハンデや半島ブームの終焉による飲食店・宿泊施設の廃業、そして過疎化と少子高齢化の進行で後継者不足による地域産業の低迷を何とかしようと考えられた「大浜大豆」のブランド化であり、行政が推進するブランド化ではなく、

地域住民が中心となって商品開発や販路拡大と進められた事で成功して一例ではないでしょうか。

本市でも、他市に負けない素晴らしいものがたくさんあるので、非常に参考になり、これからに生かしたいと思います。

・石川県宗玄酒造「酒米による地域おこしの取り組み」について

宗玄酒造様では、一酒蔵だけでなく社会人や学生などに呼びかけて、耕作放棄地を復田し、地域の中学生を中心とした体験学習による酒米の「石川門」という品種を作り、そこから生まれた純米酒は様々な所で評価され採用されている。

また、体験した中学生に5年間熟成させるタイムカプセルとして保管する活動や廃線になった線路を一部買い取り、トロッコ列車を走らせたり、様々な取り組みにより町おこしを積極的に行う姿勢に感動しました。

・石川県輪島市「本町・朝市通り整備事業」について

輪島市を訪れて一番驚いたことは、伝統産業である輪島塗の職住一体の塗師のたたずまいが今でも残っている唯一の地区であり、まち全体が統一され特徴ある風情を醸し出している。

また、輪島と言えば「朝市」であり、この両方があいまった魅力あるまちとなっている。

わが土浦市も商業で栄えた町そして伝統のあるまちとして、官民が一体となってまちづくりが出来れば、輪島市に負けない整備が可能となるのではないかと感じた。

三世代家族住宅リフォーム奨励金

世帯の所得制限がないことは普及に向けて大きなインセンティブであると思いますが、土浦市の規模で行った場合の財政負担が懸念されます。実施の場合は補助金額、財政を研究して慎重に行う必要があると感じます。

「ブランド化に向けた取り組み」について

珠洲市では大浜大豆に特化したブランド化を行っており一定の成果を得ているようです。ブランド化は集中して行う方が効果的とは思いますが、土浦市で行う場合、一つのものではなく、土浦自体がブランドになるように推進していくべきと感じます。それには1つ1つをブランド化することを積み上げる必要があり、明確なアイデンティティを掲げる必要があると思います。

「酒米による地域おこし」について

日本四大杜氏の一つである能登杜氏発祥の地でその価値を世界に発信している酒蔵にお伺いいたしました。社会人、学生と一緒に耕作放棄地を復旧し酒米を育成し、醸造する日本酒に中学生たちのラベルを貼る。それをタイムカプセルとし郷土への誇りと愛着を醸成する事業は地域おこしに寄与していると感じました。その気持ちが地元への定着につながることを期待しています。土浦市においても応用できる事業と感じました。

「本町・朝市通り整備事業」について

輪島といえば朝市が真っ先に思い浮かびます。朝市の露店は既存店の店先の道路を使用しており、整備には朝市事業者、既存店舗事業者、行政が協力をしあうことが不可欠です。困難な道ではあったようですが、それぞれの理解、協力が得られ、事業が完成しました。近隣にいわゆる「フィッシャーマンズワープ」のような新たな施設の整備計画はなかったのですか？との、質問には、輪島ではそれより朝市が大切ですとの返答でした。朝市という輪島の強みを強く認識し、皆で話し合った結果が今回の整備の完了につながったのだと感じます。また整備後の清掃、側溝の清掃などは住民が行なうことになっており、早朝に通りを歩いているときに住民の皆様が清掃されている姿も見ております。皆様が共通の目標に向かい、それぞれが出来ることをしあう姿に絆の強さを感じました。